

16. 村滝農場の草分け

千田 惣吉

※明治27年2月17日生

農場の初期開拓

私の父銀蔵が中藻村滝農場に入ったのは、大正2年で、私はそれから2年遅れて入地したのです。農場は、下川の日比（滝三郎）さん、石丸（滝蔵）さんに、上興部に居た村井丑之丞さんの共同経営でした。

※所有者は、この三人のほかに滋賀県人雨森幸三郎の四人で、後にその持ち分権利を、三人に譲渡している。

農場の管理人は、上興部から村井さんが来て、元の田中薫治さんの向側山手に、粗末な着手小屋を建て、それから田中さんの住宅近くに、立派な二階建の事務所を兼ねた住宅を建てました。村井さんは、大正二年に農場開設と同時に、中藻に入地しています。

村井さんに代って、管理人をやられた諏訪峯吉さんは、大正5年に一ノ橋から来られて、村井さんの跡に入られたのです。村井さんは、諏訪さんが来られた時には、名寄に出られ、運送店をしたりして、後に名寄町長になったと聞いています。

村滝農場の上の境界は、大沢藤五郎さんの所から（上藻零号）、下は川の右側をずっと下って、山本政春さんの向いで、桜田さんが最後に木炭焼きをしていた附近までが区域でした。また川の左側は、小林作恵知さんの向側附近までで、フトロの沢も一部含まれた変な区画割でした。

農場の開拓は、大正2年から始まったが、小作の入地は、何回も募集しましたので、一度に入地したのではなく、又一戸の区画も5町歩というのは少なく、2町5、6反から三三、4町というように、半端な面積が多く、今考えるとよくこんな面積で生活ができたものと思います。

農場最初の入殖者は、前の年（大正元年）から木挽きで来ていた近藤角治さん、興部の今の秋里から父と、森田亀太郎さんのほかに、吉田市松、義達高蔵、松下芳助、鎌田久治郎、長谷川鶴松さん程度で、このほかに古い人では、芦田棟一、長岡忠兵衛、井上慶助さんがおり、アイヌで小林由太郎という人が谷口さんの川向いにおりましたが、2年位で出て終ったようです。

古い人たちの入った土地は次のようでした。

吉田市松＝大沢藤五郎、義達高蔵＝フトロ入口、長谷川鶴松＝中原治助、井上慶助＝大沢時則、長岡藤兵衛＝千葉与左衛門、芦田棟一＝中藻橋を下へ渡った所。

中藻へ入る道路は、瀬戸牛峠を越える道もありましたが、大変な難所で、主に六興から入りました。

六興から興部川を渡り、安藤さんの牧場の沢の、下の沢から峯を越え、田中薫治さんの沢に下りて、沢ばかり歩いていましたが、大正4、5年ころに、上藻の人と共同で、今の林道に似た形で、山の中腹を崩して道路をつけました。買い物も、この道路の分れ口近くの、六興の古川商店を多く利用しました。六興には、古川の店のほかにも1、2軒あり、鍛冶屋、蹄鉄屋もあり、そのころの瀬戸牛は、小林道の店くらいで、六興の方が賑

やかでした。

開拓地は大木の密林で、木を伐ることが最初の仕事で、タモなどは枕木にとって、それも4丁どり、6丁どりの角材にしたものを、木挽きが引き割り、全部流送したもので、村井さんが、沼田の方から沢山の木挽きを連れてきて、造材をしたのです。（枕木は満州向）

また青木は、山火事で立ち枯れになっていたものを、丸太にして流送しましたが、アカダモ、ハンノキ、などの大きなものは、売れなかったので、みんな焼き捨ててしまい、今から見ると憶しいことをしたものです。

作付したものは、菜種、ハッカ、豆類、馬鈴薯などが多く、無肥料でもよく出来ました。菜種、麦類は反に5、6俵も穫れ、豆などは名寄まで駄鞍に積んで運搬し、良い値で売れましたが、一晩泊りになるので、経費もかかり、割りは良くなかったです。

澱粉工場は、大正5年ころ、諏訪さんが中藻では一番早く始めましたが、お手伝いさんの不注意で住宅、倉庫を全焼したので工場をやめ、その跡を日比源次郎さんが引き受けたのです。

この時諏訪さんが、二階建ての住宅に入っていて、全焼してしまいました。

熊に襲われたアイヌ

フトロに、砲台の沢というのがありますが、開拓当時、銃の台木に、クルミ材が使われ、この沢からその台木が沢山伐り出されたので、この名が付けられたのです。

何年ころだったか、はっきりしませんが、この沢へ名寄のアイヌで黒川という人が熊取りに来て、熊を手負いにして後を追ったところ、大きなタモの風倒木の陰にいた熊に襲われ、体をめっちゃめっちゃにされて死亡しました。黒川が何日経っても帰らないので、大騒ぎになり、皆で探したところ、ウジの沸いている死体を発見しました。

熊に襲われた後にもまだ息があったのか、ワラジを脱いで枕にして倒れておりました。

長い開拓のなかで、熊は沢山いたが、人が襲われた語は、これぐらいのものです。